

平成22年 5月26日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520607
 研究課題名（和文） 首里城絵図の研究

研究課題名（英文）A Study on Historical Evolution of the Shuri Royal Castle of the Ryukyu Kingdom
 研究代表者
 伊従 勉（IYORI TSUTOMU）
 京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
 研究者番号：00151689

研究成果の概要：

日本の近世都市絵図の研究の進展に比較して遅れていた琉球都市絵図の特徴を、首里城部分の分析を含めて明らかにする目的がある。と同時に、地理表現の媒体として、従来、全くそれに該当するものとは考えられてこなかった、琉球王国祭祀の祭祀地理的な表現について、ある種の地理表示と見なすことによって、絵地図や測量絵図が登場する前提となる文化コンテキストの分析に援用する新たな方法を考案している。

絵地図の既存資料や映像の収集を開始後2ヵ年度に行い、同時に新資料の発見に務めた結果、3点の新資料の情報を得、映像を収集した。

琉球における測量術の進展については、元文（乾隆）検地に先立つ時代の測量術の実態を明らかにし、散在していた個別施設絵図資料の捉え直しを行い、首里城絵図と18世紀初頭の王府施設差し絵図の特徴として共通することを確認した。

首里那覇鳥瞰絵図の時代変化の概要把握については、日本台湾共同シンポジウムの機会に公表した。絵地図の個別的な考察はそれぞれに進めてきているが、今後は、網羅的な研究成果としてまとめ直し、日琉中の都市絵図の進展についての比較研究に歩を進めたいと考えている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	420,000	2,820,000

研究分野：人文学、工学

科研費の分科・細目：人文地理学・建築学・建築史・意匠

キーワード：絵図・地図、琉球王国、首里城絵図、首里古地図

1. 研究開始当初の背景

旧琉球王国首里城の17世紀以前の姿を究明するため、18世紀以降に製作された現存首里城絵図資料（絵地図と鳥瞰絵図）の映像の収集を、申請者は前研究（平成15～16年度萌芽研究「17・18世紀首里城絵図の研究」（代表伊従））によって着手している。

また、絵地図が登場する以前に、祭祀世界を地理的に記述する方法として、祭祀歌謡によって巡礼参拝経路を記録する方法が口承文芸として琉球では確立していたが、それについては、昭和59年の科学研究費助成研究（奨励研究A）「沖縄本島周辺の村落祭祀に表現される地域の空間性研究」（代表：伊従勉、単独研究）以来、同じく申請者の平成4年～6年度の科学研究費補助金研究（一般研究C）「旧琉球王国首里王城祭祀、久高島祭祀祭場についての空間論的研究」（代表：伊従勉、単独研究）を経て、平成16年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）による著書『琉球祭祀空間の研究』第3部において、首里城を中心とした祭祀世界が地理的に把握される特徴を考察している。

以上のような、一見相違する研究課題のなかに、祭祀地理的な表示方法から絵図・地図を用いた表示方法が並行的に登場してくる経過を統合的に概観する方法を構築することが研究課題として浮上してきたのである。

2. 研究の目的

本研究においては、まずは、日本もしくは沖縄に現存する未知の首里・那覇絵図の発掘が第一の目的であり、その中に表示される首里城の表現の仕方そしてその意味を探ることを目的とする。と同時に、従来別個に行われている以下の研究側面をいかに関連づけて琉球における地理記述の方法の発展経過を把握するかが課題となる。すなわち、国家祭祀と政治の世界において、それぞれの地理把握の表現が、一方で国家祭祀の巡礼祭祀のルートを記録する祭祀歌謡の編集経過に現れ、祭祀地理的な概念が形成されていた。

他方で、王府施設の差し絵図記録の方法、ついで精確な地表の測量方法の発達に、そして、鳥瞰図的な表現がどのように登場してくるのかという諸局面を整理することが課題となる。

琉球における絵地図と鳥瞰絵図の先鞭をなしたと思われる首里古地図と首里那覇全景図（ともに18世紀前半から中葉に成立）以降、元文（乾隆）検地によって格段に進展した琉球の測量術により、何種類かの地域絵図や全島地図の製作が行われた。「首里古地図」はひとつの成果と思われる。他方、日本人向けの首里那覇都市絵図が鳥瞰図として18世紀に登場するが、19世紀に多くが制作される。明治期の内地人向けの土産絵図とし

ての首里那覇絵図に至るまでの鳥瞰絵図形式の発展系統とその技術を明らかにする課題もある。それらの鳥瞰絵図の進展が琉球における測量術の進展とどう関わっていたのかも明らかにしてみたい。

以上の、祭祀世界の祭祀現場での地理表示と、絵図媒体を用いた鳥瞰図による地理表示、そして、地表の精密な測量術の結果生み出される絵地図という3者の地理表示の領域は、従来それぞれ異なった研究領域とみなされ、相互の関係が検討されたことがない。それを統合的に考察する理論の構築が研究目的の重要な核心部分をなす。

3. 研究の方法

首里城を中心とする地域の祭祀地理的な把握には、東方（沖縄本島南部東側の地域）と一体となった祭祀世界のとらえ方と那覇と首里を一對のまちとして捉える観点が併存しており、国家祭祀としては異なった年中祭祀を挙行することによって、パフォーマンスとして、地理概念が表現されていた。これらの地理概念は、鳥瞰絵図表現や測量絵地図の成立の前提になる文化的コンテクストを形成している。

前項に触れたように、従来絵地図の発達とは関係のない研究領域として考えられてきた祭祀世界の地理把握の表現としての祭祀歌謡を記録する方法にも、一定の地理記述機能を認めようとするところが、本研究の方法の特徴のひとつである。

国家祭祀の挙行についての王府マニュアルがごく少数現存し、それとともに、当該の祭祀で吟唱される祭祀歌謡オモロが記録されており、同じくごく少数だが祭祀文脈が特定できるオモロ群が編集されている（『おもろさうし』第22巻）。それらを比較検討することによって、祭祀の挙行という集合行為のなかで了解されていた祭祀世界像、あるいはある意味での地理的な像を考察することが出来るのである。

拙著[2005年]第3部において、すでにこの種の考察を試みている。女性神職の主導で行われていた17世紀前半までの祭祀世界の表示行為が、18世紀以降、女性神職が不在の首里城の祭祀挙行の場で、男性歌謡吟唱者（おもろ主取）に取って代わり、かつて実際に行われていた祭祀に伴っていた歌謡だけが吟唱されることに代置されていく経過である。この作業を本研究においても進めることが目指された。

他方、絵地図と都市鳥瞰図の発達に関しては、日本近世の都市絵図研究（矢守1974、小澤2002など）あるいは近世国絵図の研究（川村1984）に登場することのなかった琉球都市絵図と首里城絵図の図法的特徴を明らかにすることにより、日琉中の都市絵図比較発展

史へとつなげようとする方向を想定している。しかしまずは、現存の絵地図と鳥瞰図の全容を明らかにすることが問題となる。

さらには、1985 年以来継続して行われてきた首里城跡の発掘調査の結果、15 世紀以降の遺構が次第に明らかになってきたことにより、現存する首里城絵図の表現精度を再検討することが可能になってきた。調査報告書はすべてが完結していない現状であるが、一部の区画について検証を行ってみることも、本研究の課題となった。

そして、都市絵図成立とその絵図の移動流通の社会的条件の考察を通じて、絵図の美術史的な分析を越えて都市情報の流通史のための基礎資料とすることが期待できるだろう。

4. 研究成果

祭祀のパフォーマンスを通じて、いわば実地に諸場所の祭祀地理的関係を描き出していく琉球の祭祀伝統については、本研究の枠内では、成果雑誌論文④から⑥の新聞記事連載、および論文①の論考、および国際シンポジウム②の発表論文（その翻訳版が論文①、英語論文は未公刊）によって研究を進めた。前項に述べた女性司祭の祭祀現場での祭祀地理的表現方法が、祭祀歌謡の吟唱だけによる代理祭祀に代置されていく経過が、どのような祭祀地理的な現実と係わっているかを明示した成果である。

採り上げた事例は、1875 年まで 10 回に亘り東方の国家的聖地斎場御嶽で行われた王国最高神女聞得大君の就任儀礼「御新下り」と、首里城正殿と御庭を舞台に行われていた稲穂・稲大祭である。

前者については、依然として東方聖地で行われながら、そこにさらに遠方の離島久高島へのかつての巡礼儀礼の痕跡を歌謡吟唱過程にとどめており、他方、首里城と同じ名前の祭祀場所を経巡ることによって「移動した首里城内祭祀」の趣を帯び、併せて二重に超過する祭祀世界のイメージを背負わされている事情を明らかにした（雑誌論文④⑤⑥）。琉球近世に登場する巡礼祭祀の空間表現のゆがみの問題がそこに見て取れる。

後者の儀礼については、神女が不在の王宮正殿で行われる稲穂・稲大祭の祭祀において、かつて神女が登場していたさまざまな祭祀文脈で歌われた祭祀歌謡を換骨奪胎して編集し直し短縮して連続吟唱することによって、全く架空の虚構の祭祀現実を生みだした 18 世紀の首里城における祭祀空間の特徴を見出した（国際シンポジウム②、雑誌論文①）。かつては城内の国家祭祀に多数登場した王族神女の不在を歌謡の吟唱で痕跡として示すことによって、パフォーマンスの欠損を補充しようとする意匠は、実は城内聖地空間の大きな変容と結びついていたのである（図書

①）。

その経過は、近年の首里城跡の発掘調査報告で明らかになった正殿・御庭・下之御庭・「京の内」地区の時代変遷を迎えることによって確認できる。現存する 18 世紀の首里城絵図とは異なる空間構成が見えてくるのである（図書①）。考古学的な発掘データは、いわば実物大の古琉球の首里城絵図を暗示しているのである。

さて、肝心の首里城絵図および首里城を含む首里那覇絵地図の探索の結果、未知の絵図については、本研究期間中に 3 点情報が得られ、映像を収集した。近々分析の結果を公表の予定である。

琉球における測量術の発展との関わりを検討する作業としては、精確な閉合トラヴァース測量が成立する元文（乾隆）検地前の段階の測量技術が生み出した王府施設差し絵図の存在を再評価することをまず行った（雑誌論文②③）。個々の王府施設絵図が散発的に確認されていたが、それがどの時代にどのような目的をもって製作されたのかという点に関しては、従来定説が存在しなかった。それが、元文（乾隆）検地の時代に先立ち琉球で確立する「十文字」測量の概略的方法による琉球独自の施設測量であったこと、その中のひとつの差し絵図として首里城絵図が画かれた可能性を提示した（同前）。

戦前から知られていた「首里古地図」（現物は戦災で焼失、映像写真と写図のみ現存）と近年発見された上記「首里城絵図」（論文③）との関係は、本研究に取り組む前の平成 15～16 年度萌芽研究「17・18 世紀首里城絵図の研究」の枠内で、新聞紙上に 3 回連続の掲載記事（『沖縄タイムス』、平成 16 年 6 月 7 日、14 日、28 日朝刊）により、概略を論じているので、本研究の直接的課題とはしなかったが、次に述べる首里那覇鳥瞰図の成立との関係で論じ直す必要がある。次の課題である。

すなわち、18 世紀中葉以降 19 世紀にかけて急発展がみられる測量術と首里那覇鳥瞰図の登場との関連については、他の研究者の近年の仕事を参照しつつ、日本近世の都市絵図の進展と対比して琉球絵地図発展の特徴を概略的に把握する研究報告を日本台湾共同シンポジウムの場で公表した [2007 年 11 月シンポジウム①発表]。これを論文にまとめあげるのが、今後直近の課題である。

さて、1 カ年研究期間を延長し平成 21 年度に、絵図資料のデータベース化を試行的に行ってみた。それを大学院の授業などに私的に用いてみた結果、絵地図の提示による分かりやすさなどの点で一定の効果を確認したのであるが、絵図映像の公表には著作権などの認証に問題が残り、映像の一般公開は難しく、表現媒体は限定的にならざるを得ない状況

が判明した。総合的な公表には、依然として個別の出版物による方法が適しているようであり、今後公表形態については検討を続けてみたい。

総じて成果をまとめてみると、研究計画の大枠を描き出すことが出来た。国家祭祀における地理表現の分析と測量絵地図の発達の考察には一定の成果が得られたが、首里那覇鳥瞰絵図の歴史の変遷における首里城絵図部分の意味の分析については、国際シンポジウムでの概論の公表(学会発表②)を除いて、研究成果の公表が遅れている状況にある。今後、この面での研究成果の公表に努め、ひとつのまとまりをもった著作にまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①伊從 勉「琉球祭祀にみる虚構と現実」『国際沖縄研究』1、35-50頁、琉球大学国際沖縄研究所、2010、査読有り
- ②伊從 勉「元文(乾隆)検地以前の測量法と絵図」『しまたてい』47、8-11頁、沖縄建設弘済会、2008、査読なし
- ③伊從 勉「新発見の「首里城古絵図」の測量法について」『民族芸術』23、37-47頁、2007、査読有り
- ④伊從 勉、「琉球王国聖地巡拝の源流」(下)2006年11月22日1頁(短期連載)、審査なし
- ⑤伊從 勉、「琉球王国聖地巡拝の源流」(中)2006年11月21日1頁(短期連載)、審査なし
- ⑥伊從 勉、「琉球王国聖地巡拝の源流」(上)『沖縄タイムス』2006年11月20日朝刊1頁(短期連載)、審査なし

[学会発表] (計2件)

- ①伊從 勉、「琉球王国首都のイメージの成立について：日本人と中国人のそれぞれの琉球」、台湾中央研究院歴史語言研究所・京都大学人文科学研究所共催「日本・中国近世の都市生活」シンポジウム発表論文、京都大学人文科学研究所、2007年11月11日

②IYORI, Tsutomu, «Reality and Illusion in Ritual Performance in Ryukyu»,第5回沖縄研究国際シンポジウム「想像の沖縄：その時空間からの挑戦」(ヴェネチア, カ・フォスカリ大学) 発表論文(英文)、2006年9月14日

[図書] (計1件)

- ①伊從 勉「遺構からみる古琉球の首里城」

『沖縄県史各論編 古琉球』所収 427-450頁、沖縄県教育委員会、2010年、執筆者選考・査読有り

[その他]

ホームページ等：

<http://www.kyotomodlab.jinkan.kyoto-u.ac.jp/iyo/ri/arti-okinawa.html> (研究成果概要の公開)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊從 勉 (IYORI TSUTOMU)

京都大学・大学院人間・環境学研究所・教授

研究者番号：00151689

(2) 研究分担者

なし

(2) 連携研究者

なし